

万年筆

万年筆およびペン先工業は、最近設備過剰または過当競争により不況で、このため設備合理化、生産調整等を行う必要があるという。

現在、万年筆の年間生産能力は約300万ダースと推定されているが、その内国内需要は約100万ダース前後で、その他は香港市場を中継して、東南アジア、中近東、アフリカ方面に輸出され、後進国の教育程度の向上と相俟つて、今後の輸出の向上が期待されている。

全国にある万年筆工場は61工場、ペン先製造工場は50工場、計111工場、東京通産局管内が79工場、大阪通産局管内が26工場、広島通産局管内が6工場となつている。

万年筆の部品のうち、ペン先の総生産量は2,563千ダースで、金ペン先が317千ダース、耐酸ペン先が2,247千ダースである。

本県では、土浦の黒田製作所と牛久町の齋田製作所がペン先を作つており、他に古河に軸を作るところが1カ所ある。

世界の新聞

世界各国で発行される日刊新聞

(1週間に4回以上発行される新聞)は約7,139種類ある。アメリカの1,824種、西ドイツの481種、中国(本土)の392種、ソ連邦の385種などが多い。日本は94種。発行部数ではアメリカの56,596千部、日本の36,373千部、イギリス29,100千部、ソ連21,475千部西ドイツ14,700千部といつた所。

千人当り発行部数ではイギリスの573部、スウェーデン462部、ルクセンブルグ435部、フィンランド420部、日本400部、アメリカ337部、ソ連107部となつている。

1人当りの新聞用紙消費高はアメリカ36.3キログラム、カナダ25.1キロ、ニュージーランド28.4キロ、オーストラリア27.2キロ、スウェーデン24.8キロ、イギリス20.0キロ、日本5.9キロであるが、これは新聞のページ数と関係しているわけか。なおこの統計は国連統計部の資料だが、調査年がまちまちだし数字も概数が含まれているから念のため。

縦

横

軸

軸

昭和34年1月～12月の国産自動車の販売状況を見ると、トラック、バスなどの普通車が53,133台、小型4輪車が194,593台、総計247,726台で、昭和33年の183,070台より大きく増加している。車種別に見ると、小型4輪トラックが122,383台で1番よく売れている。

又、輸出はトラック10,107台、バス393台、小型4輪車は7,459台であり、賠償はトラック560台、バス14台、小型4輪車586台となつている。

国内向の販売を、販売先の業種別にみると、ガソリントラックは、公務、建設業、製造工業など、ジーゼルトトラックは、道路貨物運送業、建設業、製造工業が多く、一方小型4輪トラックとなると商業、製造工業が圧倒的、小型4輪乗用車は道路旅客運送業が多い。

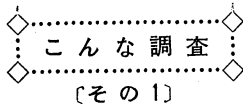
昭和34年の中学校卒業者の就職先を産業別に見ると、製造業が最も多く、全就業者の50.4%にあつている。ついて農業15.2%、卸売小売業13.0%、サービス業11.4%がおもな就職先である。

次に高等学校卒業者の就職先をみると、製造業へ30.5%、卸売小売業へ25.0%であり、この両者で約半数を占める。続いて農業9.3%、サービス業6.8%、金融保険業6.7%、公務6.2%、運輸通信業5.8%、建設業3.1%の順となる。

では大学の卒業者はどうか。昭和34年大学、短期大学の就職者は、それぞれ93,170人、16,087人で、卒業者に対する割合は大学79%、短期大学55.1%に当るが、男子と女子では男子のほうがいつそう就職する者が多く、たとえば大学の場合、就職の割合は男子82.3%に対し、女子57.0%である。大学卒業者の就職先は製造業29.4%、サービス業24.5%、卸売小売業15.0%が多く、また短期大学においてはサービス業34.8%、製造業21.2%、公務11.7%が多い。

自動車販売

就職先



商業動態統計調査

国で行っている調査の中に商業動態統計調査というのがある。この調査は統計法にもとづいて行われる指定統計調査(第64号)で、通商産業省が、昭和28年6月末から実施し、その後昭和34年9月まで3カ月ごとに継続して調査を行い、昭和34年10月からは毎月調査(速報)をあわせて行つて来た。

この調査は商業活動の動向を、敏速かつ継続的に明らかにして、景気観測その他の有効な資料とするのが目的で、全国約180万の商業事業所つまり商店(日本標準産業分類大分類G—卸売業、小売業に属するもの)から一定の標本抽出理論によつて選出された商店について実施し、それから得られた結果にもとづいて全国推計を行っている。

調査の方法を少しくわしく述べると、この調査は甲調査と乙調査とに分かれるが、

甲調査は全国卸売商店のうち(小売商店は対象にならない)従業者(臨時・日雇の従業者を含まない)50人以上の商店については全数について、毎月調査を、又30人~49人の従業者をもつ卸売商店は、半数づつ抽出されてA、Bの2組に分けられ、それぞれに1年交替に毎月調査を行う。調査の事項は毎月末の商店名、商店所在地、従業者数、及び調査月間の商品販売額及び6、9、12、3各月末の商品別商品手持額である。

また乙調査は、通産大臣が指定した調査地域内に所在する全商店(卸売業、小売業とも。ただし甲調査の商店をのぞく)について行い、毎月調査を行う地域と4半期調査を行う地域とがある。調査の事項は、商品名、商店

所在地、従業者数、商品販売額、商品手持額、月賦販売およびチケット販売、主要販売商品である。

調査の結果は、甲、乙両調査とも業種別に集計されて「商業動態統計月報」と年4回の「商業動態統計季報」に公表されている。

本県では甲調査のうち50人以上の商店が8、30~49人の1年交替の商店14が毎月調査の対象となつており、乙調査の調査対象として常陸太田市(対象商店70—4半期調査)北浦村(同じく39毎月調査)日立市(73毎月調査)藤代町(61毎月調査)が抽出されている。

この調査による卸売業、小売業の歴年別販売額指数が発表されているのを下にのせておこう。

卸売業の歴年別販売額指数は次表のとおりで、34年は総額で166.3となり、33年の139.9に比し、18.9%の伸びで、これは鉱工業生産指数(対前年24%増)同生産者出荷指数(同22%増)の伸びに概ね歩調を合わせた伸び率であつた。

小売業の歴年別販売額指数は次表の通りで、34年は総額で164.2となり、33年の147.6に比し11.2%の伸びを示した。これは33年の97.1%を上回るものであつたが、百貨店の販売額は14.8%の伸びを示しており、これにはおよばなかつた。

小売業と百貨店の前年同期に対する伸び率を過去3年について比較してみると次表のとおり、34年後半百貨店は特に好調。

第1表 卸売業歴年別販売額指数

歴年別	総額	繊維、衣服身のまわり品	食料、飲料	機械器具	鉱物金属材料
昭和29年	87.3	87.0	88.8	88.7	84.5
30	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
31	124.0	126.5	108.0	157.6	157.5
32	149.6	146.1	110.8	226.5	237.5
33	139.9	140.7	123.1	217.1	199.6
34	166.3	188.3	141.9	266.7	254.0
34年の対前年伸び率(%)	18.9	33.8	15.3	22.8	27.3

第2表 小売業歴年別販売額指数

歴 年 別	総 額	織物衣服身のまわり品	飲 食 料 品
昭 和 29 年	90.4	91.3	88.9
30	100.0	100.0	100.0
31	118.7	124.8	115.9
32	137.8	138.4	130.0
33	147.6	145.3	137.1
34	164.2	162.4	149.8
34年の対前年伸び率(%)	11.2	11.8	9.3

第3表 小売業と百貨店の対前年同期伸び率(%)

年・期	小売業	百貨店	年・期	小売業	百貨店	年・期	小売業	百貨店
32. 1~3	22	23	33. 1~3	10	11	34. 1~3	7	10
4~6	17	22	4~6	4	9	4~6	15	12
7~9	18	24	7~9	8	7	7~9	11	17
10~12	10	14	10~12	7	9	10~12	12	18

丁 半 批 判

博打仲間の言葉に、〃九半十二丁〃というのがあるそ
うだ。映画などでみる賭博場面というのは、何れも瓦
のような貪欲な眼を充実させてサイコロを追う目と目、
汚れた空気に煙草の煙りがからんでいるといった場面
決してスマートだなどとは、義理にもいえない処としか
想像できないのは、残念(?)である。

然し彼等は、彼等なりに倫理というものがあるかも知
れない、何故なら賭博を公認している国さへあるし、競
輪だつて競馬だつて、サイコロの代りに自転車になつた
り、馬を用いているだけであるから。

さて話を戻して、〃九半十二丁〃に触れてみたい。博

打が丁の目・半の目によつて賭けるという位は周知のと
おりである。二つのサイコロの目の合計が、偶数であ
れば、即ち2・4・6・8・10・12であれば、丁の目であ
り、奇数即ち1・3・5・7・9・11であれば、半の目
となる訳で、九半は半の目が九つ出るのに対し、十二丁
は、丁の目が十二の割合いで出るというのである。即ち
丁半の確率は、12：9の割合で出るという訳であるが、
これは、どの様な根拠から誘導されたものであろうか。
これを、次のように甲・乙二つのサイコロを組み合わせ
て、目の数をならべてみると、

=甲乙二つのサイコロの組み合わせ表=

行 \ 列	A	B	C	D	E	F
イ	甲 乙 1 . 1	甲 乙 1 . 2	甲 乙 1 . 3	甲 乙 1 . 4	甲 乙 1 . 5	甲 乙 1 . 6
ロ	2 . 2	2 . 3	2 . 4	2 . 5	2 . 6	
ハ	3 . 3	3 . 4	3 . 5	3 . 6		
ニ	4 . 4	4 . 5	4 . 6			
ホ	5 . 5	5 . 6				
ヘ	6 . 6					

※この表で、A・C・Eは丁の目
B・D・Fは半の目
※上記のような数列のとき、縦（A～F）を列、

横（イ～へ）を行として取扱い、例えば、3・5の目の組み合わせは、C列ハ行として表示することは周知のとおりである。念のため。

さて、上記のような表が出来たのであるが、この表を見れば、B・D・Fの組み合わせの数は、半の目九つであり、A・C・E列の組み合わせは、丁の目十二である。

博打仲間の丁半の目の出る割合が九半十二丁としていわれて来た根拠が、表に書き表わすことによつて明確になつた訳である。

然し、ここで統計人である諸賢は、すでにこの表に疑念を持たれた事と思う。この表の示している矛盾は、全く御指摘のとおりである。それでは、その矛盾点につい

て更に分析を加えてみたい。

その矛盾点は、丁半の目の組み合わせは、二つのサイコロによつてなされるという点にある。具体的な例を上げれば、B列イ行の組み合わせは、甲のサイコロ1の目に対し、乙のサイコロ2の目であることを示しているが、1・2の目の組み合わせによつて出来る半の目は、甲が1、乙が2ばかりでなく、その逆、つまり甲のサイコロが、2の目の時と、乙のサイコロが1の目のときとの組み合わせによつても、当然半の目として出る筈である。即ち、同様に、B・C・D・E・F列は、すべて甲・乙逆の目によつても、表示されなければならない。

であるからこの点の計算も入れて丁半の組み合わせの表を書き替えれば、次のとおりになつてくる。

行 \ 列	丁 A	半 B	丁 C	半 D	丁 E	半 F
イ	1・1	1・2 2・1	1・3 3・1	1・4 4・1	1・5 5・1	1・6 6・1
ロ	2・2	2・3 3・2	2・4 4・2	2・5 5・2	2・6 6・2	
ハ	3・3	3・4 4・3	3・5 5・3	3・6 6・3		
ニ	4・4	4・5 5・4	4・6 6・4			
ホ	5・5	6・5 5・6				
へ	6・6					

この表によれば、半の目の組み合わせは、B・D・F列の数18組であり、丁の目の組み合わせの数は、A・C・E列の18組である。

従つて九半十二丁は、当然十八半十八丁と改めるべきであり、丁半の確率は、各々二分の一でなければならない。

長協差の時代から、九半十二丁の大原則の下に、賭場を開き、子分共を養つて来たとするれば、サイコロに特殊工作をしたいかさまか、ドスの睨みで儲けていたといわざるを得ない。

ここで丁半批判を、もう少し論理的な姿で裏付けをしたい。サイコロは、1の目から6の目までである立方体で同質に作られているとすれば、その各々の目の出る確率は、それぞれ6分の1である。二つのサイコロを同時に投げた場合に、そのうちの各目の出る確率は、6分の1の2乗、即ち36分の1となる筈であるから、逆に表現すれば、すべての組み合わせの場合の数は、36組み合わせになる訳である。そしてサイコロの1の目から、6の目までの偶数目と奇数目の出る確率は、3：3即ち2分の1

であり、これは二つのサイコロについても同様である。

組み合わせの総数(6²)×丁(半)の目の出る確率($\frac{1}{2}$)=丁(半)の目の出る組み合わせの数

丁の目の出る組み合わせの数=36× $\frac{1}{2}$ =18組み合わせ
同様に半の目の出る組み合わせの数=36× $\frac{1}{2}$ =18組み合わせ、故に18半18丁となる。

上式の様には、丁半の目の組み合わせは、昔も今も、時の流れには無関係に、その確率は2分の1であつて、丁の確率十二丁即ち21分の12とか、半の確率九半即ち21分の9というのが誤りであることが解る。





2 と 3 に 御 用 心

統計に切つても切れない縁のあるのが数字であります。私達統計マンは、それこそ1日として、この数字から解放されることがありませんが、この数字、0から9までわずか10種類がありませんのに、随分厄介なものです。

私達のやる仕事は統計の仕事といつても、数字の転記集計、読み合せといった比較的単純な仕事が多いのですが、これが単純なようで中々面倒なものです。転記したものを読み合せ、更にソロバンを入れてみても、どうしても合うべき数字が合わないで、よく調べて見たら9と7とを書き違えていたということがあります。読み合せの時に、どちらかが見違い、読み違えてしまったのでしょう。このような経験は多くの人々が持っています。

今度、昭和33年茨城県統計書が刊行されたのを機会に印刷屋さんの誤植が、数字の場合どんな工合になるかを赤い鉛筆でところどころに訂正を加えたあとのあるゲラ刷(校正刷)で調べて見ました。0から9まで10個の数字のうちで、特にどの数字が、どの数字に間違われ易いか別表を御覧下さい。

この場合0から9までの数字の出ている回数が等しくなければ、特にどの数字が読み違える可能性があるなどと、早まったことは言えないかも知れませんが、茨城県統計書は314頁のもので、しかもそのほとんどが数表で

ありますので、この点は一応許せるのではないかと思います。ただこの統計書は1人の人がほとんど独りで版を組んだために、その人に特にある数字をある数字に見違える癖があつたかどうかは、考えにおかないことにしましょう。

さてこの表の見方は例えば、お互いに間違つた数字の組合せ0.1のときの誤植回数13とは0を1に見違えて誤植した回数と、1を0に見違えて誤植した回数との合計であります。ですから全部で382の誤植回数のうち、2を3に誤植したのが27回、3を2に誤植したのが23回合せて50回もあつたと言うことです。そしてこの50回という回数は合計382回の誤植回数を0.1,0.2等の組み合わせの数45で割つた1組当りの平均誤植回数約8回の6倍以上にもなつているので、表題に2と3に御用心としたわけです。

なお、この平均誤植回数の2倍以上つまり16回以上誤植回数のあつた組み合わせについてはゴジツク体で表わしました。また余計なことも知れませんが、隣りどうしの数字を入れ違えた(例えば2397が3297となつている)個所が全部で43カ所、つまり8頁に1カ所の割合でありました。又数字が逆になつている回数は229回ありました。

別 表

お互いに間違つた数字の組合せ	誤植回数	お互いに間違つた数字の組合せ	誤植回数	お互いに間違つた数字の組合せ	誤植回数	お互いに間違つた数字の組合せ	誤植回数
0.1	13	1.5	4	3.4	8	5.6	13
0.2	8	1.6	8	3.5	6	5.7	2
0.3	1	1.7	4	3.6	12	5.8	7
0.4	5	1.8	0	3.7	1	5.9	7
0.5	3	1.9	3	3.8	8	6.7	2
0.6	13	2.3	50	3.9	4	6.8	4
0.7	5	2.4	8	4.5	12	6.9	19
0.8	10	2.5	9	4.6	5	7.8	10
0.9	8	2.6	2	4.7	11	7.9	28
1.2	17	2.7	6	4.8	4	8.9	19
1.3	7	2.8	5	4.9	3	計	382
1.4	5	2.9	3				

新市町村の横顔

久慈郡 里美村



佐川村長

1. 概況

本村は茨城県の北端に位置し北は福島県と接し、東は一部の山脈をもつて高萩市と、西は山嶺をもつて大子市に境する山村である。常陸太田市から福島県東館行のバスで1時間20分で、

役場のある大中に着くが、道は1本道、福島県棚倉市に至る県道棚倉街道が、本村の中央部を

流れる里川の渓流を縫うように北進して、沿道は山水の景に富む。

昭和31年9月1日、旧小里村、賀美村の両村が合併して里美村が誕生したが、面積120.36km²、世帯数1,442、人口8,068人(男3,878人、女4,190人)で人口密度は七会村と並んで最も低く、その点人口過剰に悩まされている者にはこの村にのどかな牧歌調を感じるだろう。

村の総面積の6割が山林で原野牧野は1割近い。昭和33年に完成した白モルタル塗りの役場庁舎は窓が広く、しようしやな姿が周囲の緑に映えて美しい。

2. 産 業

村の経営耕地面積は670haで、うち田は410ha、畑は254haである。農家数は1,036戸、農家人口は6,424人(うち男3,040人)で、1戸あたり経営耕地は0.65haとなっている。主要生産は、米麦のほかたばこなどがあるが、山村の例にもれず、耕地が狭いので畜農業に力を入れている。

1回に2,000羽をかえず育雛所があつたり、長野から種亀300羽を入れて、10年後には村中を兎で1杯にしようという計画があつたりして、この村に人間が生き残れるのかと心配だ。そのためでもあるまいがこの村の人口が5年来減少の一途をたどっているのは変つた現象だ。

しかしこの村の特色はなんといつても牧場であろう。ここは水戸藩時代から馬の産地として知られて来たが、小里牧場は久慈駒本場の代表的な放牧場で、県でも35年

度はこの牧場の整備に意を用い、向う10カ年計画総予算2,033万円で、典型的放牧施設を作ろうとしている。そして乳牛、役牛各250頭の放牧を目指しているが、とくに従来岡山あたりから導入していた素牛をここで生産して県の素牛生産地にしようとしている。

年々久慈駒の馬市がここで開かれる。昨年は2才駒187頭が売買され、栃木、群馬、埼玉、山梨、福島から馬喰が集り平均32,600円の値が建つた。

村には材木屋が多い。森林総面積の半分以上が国有林だが、その伐採が福島山奥からこの村へと移動して来たので忙しい。それに最近お定まりの樹種転換で、山仕事には事かかない。しかし、このところ木炭の生産は下つて行く傾向にあるという。

村の交通網だが、大子高萩間、大子川尻間に国鉄バスが走り、また細田、折橋から日立電鉄のバスも出ているので、近年日立への勤人が多くなり、現在40~50人が通っている。

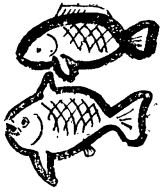
3. 教育文化

村では35年度から奨学資金制度を設けた。高校生には1,000円から5,000円の間、大学生には2,000円から8,000円の間を月々支給する。貸与分の半分を卒業後20カ年に返済すればよい仕組みである。予算は今年度は10万円、来年度は20万円の予定である。

又農村青年を対象としては、33年に316万円で小中に青年研修所が建設され、種々の行事に利用されている。

村は南北に長く東西に狭い。よく烏帽子のような形をしているといわれるが、その為に村の連絡なども不便が多い。この解決策として、必要個所に公衆電話を設置したことはよかつた。

里川を下つてくると、処々に小さな発電所がある。800kw程度の小規模なものだが、渓流に一点景をそえる。だがこの村には無点灯部落が9部落あつて50戸程がまだ文化の恩恵に浴していない。しかし、その解決も村の意欲的な開発計画によつて日時の問題となつているようだ。茨城の山村ほどの村も明るい感じがするが、この里美村も、その窓ガラスの大きい白塗りの庁舎のように、広くゆつたりと建設されて行くことだろう。



歯 車 の 弁

統計の仕事をして頂くようになってから十二年になります。この十二年という年月が長いのか、短いのか。ひとにより、立場によつて、長いとも、短いとも言えるでしょうが、十年ひとむかしなどと言われるくらいですから、まあ長いということにしておいて下さい。すくなくとも、この私に関する限り、この十二年は、過ぎし人生の三分の一に相当するのですから、実に長い期間に思われると言つても、誰も文句を言わないでしょう。

とにかく、この十二年、統計という仕事は、面白い、良い仕事だと思いつつやつて参りました。やり甲斐のある仕事だと思つております。この点非常に幸福なことであります。しかし、山高きが故に尊からず。仕事にしても、長くやつたというのばかりが能ではない。その内容が問題でしょう。果してこのおれは、この十二年のあいだ、何をやつたと言えるだろうか。かえりみて、まことにおはづかしいと申し上げるよりはかはありません。

プロ野球に、十年選手という制度があると聞きます。これには、同一の球団に、十年もの長きにわたつて働いた律義さに報いるという趣旨がこめられていると思われまます。また、そんなに長く野球をやつていれば、たいてい技倆衆にぬぎんでたベテランになれるはずで、その技倆に敬意を表するということもあるかも知れません。

ことのついでとは言ひながら、こんなことをここで持ち出したについては、別に他意はありません。もちろんこの身を野球の十年選手と比較しようなどとはとんでもない話し。この統計の十年選手クンに至つては、衆にすぐれた技倆なんてなんにもない。ただ、十二年もの間、こつこつと歯車のようにやつてきた律義さ（みたいなもの）だけは、どうやら一人前かと、わずかにひとりなぐさめている次第。もつとも、この律義さというやつ、愚直と紙一重ぐらいの仲良しだということが玉にきずであります。

たしかに、ふつうの役人的感覚(?)をもつてすればひとつの仕事に終始一貫、十年以上も従事するなどということは、おどろきに値することと言えるようです。こんなに長い間、好きな統計に従事できたということは、

好運以外の何物でもなかつたと、私としては思つていますが、しかし、たまにはこんなこともあります。

「やあ、どうもしばらく。ところでお仕事の方は？」

「はあ、相変ず……」

「えつ！まだ統計ですか」

と、こんな具合に、へんに同情されたいになつてしまい、この私自身も、なんだか面目ないような氣持になつてしまうことです。長いこと統計をやつているのが、そんなにアワレムベキことか。むしろ、これほど自分の性に合つた仕事は長い方が良い—と思つている私としては、いささか不覚なはなしなのですが。

たしかに、この面目なきのかげには、十二年も同じことをやつていて、未だ半芸？にも達しないことへの悔恨があります。しかし、いささかの弁解を許してもらえらば、いまの巨大な統計の機構にも一半の責任はあると思うのです。

たとえば、最も本格的な指定統計などの場合、仕事は本省～県～市町村の段階で行なわれるわけですが、たいいてい指定統計は中央集査(中央で分類、集計すること)ですから、極端に言うとう調査票は、単に私の前を、上(本省)からと下(市町村)から、交互に流れてゆくにすぎないと言つても良いのです。つまり、私は、いや私ばかりでなく大部分の統計従事者は、統計組織を大きな機械にたとえるならば、ひとつの歯車にすぎない観を呈します。

この歯車の立場からは、全体の見とおしが立ちにくい。また、歯車自身の働き以外に他をかえりみる暇がなくなり易い、ということはある得ることです。この私という小さい歯車も、ご多聞にもれず、タダの歯車としてその使命に充分満足しつつ、のんきに今日に至つてしまつたという次第なのです。

どうやら、かえりみて他を言うハメとなつてしまいました。おまけに、現代機械文明のもとの組織と人間の問題にまで首を突つ込もうなどは、思いももうけぬことであります。我が筆の短かきにくらべて、統計十年はいささか長すぎたということでしょうか。(真)